

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
昭和五十六年九月十五日 発行 (毎月一回・十五日発行)

(通第三八七号)

次

63.9.12

◎

信仰談話会質疑応答録……………近角常観……………(1)  
久遠のまこと……………福島政雄……………(6)  
信行いろは歌……………井上善右エ門……………(8)

目

凡骨日誌抄(7)……………西元宗助……………(11)  
九条武子夫人について……………川畑愛義……………(13)  
念仏詩抄……………木村無相……………(18)  
最近心に去来すること……………花田正夫……………(21)

慈

光

第三十三卷

第九号



# 信仰談話会質疑応答録

近 角 常 観

(問者一)

私は家父などの考えと私の考えと、濟まないが違うことがあります。その場合、自分の考えを通うせば家父の意見を無にする事となり、さればとて自分が折れ、ば犠牲になったようである。かした立場となり、いつもここで私は行き詰る。それを露骨に父に話すと、父はいつも理屈を言わず親のはからいにまかせ、と言います。……

(答)

それはよく内容を承って申ししても宜しいが、親御の信仰状態にもよると云うものの、私は親御の言われるように言うてよいと思う。その右にも行けず左にも行けず、いよいよ行き詰まるところに、最後の血路があると信ずることによいではありませぬか。自分は今このような逆境にいる、前途の見込みがない。その行き詰まる自分のために、見捨て給はざる広大の大悲がまします、と頂く処がそこであります。

(問者一)

イヤそこまで行けぬので、私は困るのです。

(答)

その行きあたり、分るところまでゆかなくてははいませぬ。

(問者一)

事毎にそれでやって居ります中に、或時はそれが分るようでもあります、どうもはっきり分りませぬ。

(答)

あなたはそこを、未然に分ろうとするからいかぬ。今私があるあなたのおっしゃるだけで言いますと、我々がお慈悲頂いた味わいから言いますと、我々が人生の逆境に行きあたり苦しみというのも自分の方のはからいなれば、又あなたがこのお慈悲を頂かずに、親の言を聞いてやって居れば、必ず行きあたり困ると思わるるのも、自分の計らいである。……

(問者一)

つまり私は何も分らぬのです。

(答)

そうです。こちらは何も分らぬ者なのです。その分らぬ者ゆえ、遣る瀬なく思召して下さいが、仏の慈悲なのであります。

こちらは本来何も分らぬ者——私など、自分も相当に人に善く出来るように思い、人もかくしてくれるだろうと、思っているのでありますけれども、思うように人も善くしてくれねば、自分も出来ぬ。その出来ぬから苦しむ自分を、そうしてみようのない有様をよくしろしめし、その者を捨てぬとのお慈悲が、仏の広大なお心なのであります。

それでひとたび、このお慈悲に気がつき、夜が明けて有難いとなると、ここで飽くまでも捨てぬとのお慈悲故、このたびは此世のみならず、死後までもこれでやらせて貰えるのです。これが実に有難い。こちらは死ぬのが、こわい奴、その者が遣る瀬なきお慈悲一つでこの人生を通うらせて貰えるのであります。

「人生のことは何程のこともない、親のすることにまかせておけ」では、これを自分の力でやると「何んとなろうと人生はかかるところだから我慢しておれ」という事になる。しかもそれで自分の意見が、少しでも折れるかという

にちつとも折れて居はせぬのである。

ところが、今仏の広大なお心をいただいて、その遣る瀬なき思召しにまかすというのは、何も苦しい処を我慢して通せとのことでは無い。この遣る瀬なき思召しに安んずれば、動くべき場合には、大いに動かれるようになるのである。……

(問者一)

先生はすぐそこに行かれるからよろしいが、私などそこに行くのが甚だ遠いので……

(答)

それは、その遣る瀬なきお慈悲に、夜が明けなくてはいかぬ。私じゃとて、何も始終心が「らく」であるわけではなけれども——否時には大いに苦しい時がある。でその苦しきところがあれば、それをじっと辛抱してるより外はない。

この間も、誰やらが、信仰など甚だ窮屈でこまると言われた。現に本年一月号の『求道』に告白を書かれた清水さんの奥さんが言われた。「お慈悲を知らぬ前なら、今の苦しみはなかりに、今では喜ばせて貰うばかりに、仏にすまぬと思うと、欲するままに行けぬ」と云われた。これが人を相手に「欲するままに行けぬ」でなく、かかる者をあわれみ下さるお慈悲に対して、行けぬのである。信仰の



味いはこんなものなのであります。で、さきほど申した「仏天の御はからい」が、時によると甚だ「らく」ではない。私など「仏天の御はからい」を言つた時は、一番苦しい時であつた。自分が信仰上より人のためにしたことを、人はみな反対にとり、誰も信仰のことは耳に入れてくれぬ。自分が信仰上からするだけ、人が理解してくれぬ。そこで私一人に信仰をいたただかそうなどとしたのが、いらざる私のはからいであつた」と一殊に思わせて貰つたのは、親鸞聖人が「仏天の御はからい」を云われた当時の関東の信仰上の乱れであります。ことに御子善鸞上人が、その間違いをせられたことは、聖人にすれば如何におつらかつたであろう。聖人にすれば、念仏成仏は真宗、これ一つを知らせんならんと、長々関東における御苦労があつたのに、善鸞上人が、それをこわして歩かれたとは、如何にもおつらかつただろう、と思わせていただいたのであります。これに対する聖人のお言葉が「仏天の御はからい」というお言葉でありました。この仏天の御はからいにまかせるといふ、まかすことの出来るのは、まかすことの出来る偉大なる御力故に、まかすことが出来るのである。

先日も誰かに申しましたが、私共が人に対し、何か済まぬ事、譬えば借金でもして、これを先方に出かけて断りを

言わなくてはならぬとする。ところがこちらでは、済むとか済まぬとか、種々に善し悪しのはからいを廻らして、先方に行くと、先方では、このことは自分のはからいにまかせておけと言われる。然しその親切は有難いが、それでは自分が済まぬと思うと、どうしても向うのことにばに従えぬ。ところが先方は甚だ氣のよきことにて、突然自分の方にやつて来て、こちらが済む済まぬと氣をもんで居る矢先きに、そのことは忘れたように、甚だ無邪氣に話して遊んで居られる。それでも此方はそのことが心にあるもの故、いらざる私の善し悪しのはからいを止めようと思つても止まらず、心が落ちつかぬ。ところが向うはこちらのその思いを察して、「自分は実に君の心をよく知っている。君はきつとあのことを苦にして居るのだろう。君が自分のために、それほどに氣をもんでくれる心は、能く分っているが、あのこととなら、善きも悪しきも、自分の考えにまかしておいてくれ。自分は実は君がそのように心配するのが氣の毒な故、先日もあのように言つたのである。実は自分が今日出て来たのも、君が色々自分に対し氣に病んで居るのが氣の毒故、自分は何とも思つて居らぬと、さりげなく自分の方から出かけて来たわけである。何も恩に着せて出て来たのではないから、自分の心を受けてくれ」と。これを言われた時には、如何なる者でも「ああそうであつたか、それほど親切に考

えてくれるのであつたか。それをかれこれ思つて居つたのは、実に申しわけなかつた」となる。

故に、善し悪しのはからいの止むのは、善し悪しのはからいをする此方の心を知り抜き、その心根をあわれんで、飽くまでその者に大悲をもつて向うて下さる、遣る瀬なき仏のお心を頂かぬことには、駄目なのであります。

全体私は物事を非常に氣にする性質である。その癖はなほだ横着に暮して居るのでありますが、先日も或人に手紙を書くことを頼まれて、書かねばと思つていても、何うしても書けぬ。心に甚だ済まぬことと思つて、顔を見てから言つては云い訳になる故、一寸人に伝言して、「済まないが、まだ書いてない」と伝えて貰うた。それをきかれると、その人にすれば「アアそうだったかな」と、それだけである。また人がいつか自分のしてやつた事をどう思つているか知らんと氣を廻して、思つているうちは心が「らく」でないが、思いきつて「君、いつかこういふ事があつたが、あれを君はどう思つているか」と打出し、「イヤあの事が、あれは君の親切を常に深く感謝している」といわれてみれば「アッそうだったかい」とそれだけである。

で、我々にこの善悪のはからい心のある事を向うの方よりさきに知り抜いて、その者をお見捨て下さらぬお慈悲に夜が明けぬことには、苦しいのであります。この人生の生

活上の苦しみも苦しいが、このお慈悲に夜が明けぬ苦しみが、中々苦しいのである。そこになると、かの生沼夫人、(岡山医大、生沼曹六先生の夫人)であります。この方は長らくこの会館において下さる若き御婦人で、今春、鎌倉で病を養つておいでになるのでありますが、この頃時々御伝言がある。この間も『歎異鈔』の九章を大きな紙に書けとの御依頼で、それは以前に私の書いて差しあげて置いた名号を形見として御長男に遣し、御次男の方には、この『歎異鈔』の九章を遣したいとの御希望であつた。私は假名は誠に下手で、生沼さんには恥しいのでありますけれども、先日書いて差上げておいたのであります。それは生沼さんはお病気で、自分は何時死ぬかも知れぬ。死ぬと思つと、九章に

仏かねてしろしめして煩惱具足の凡人と仰せられたることなれば、他方の悲願はかくのごとき我等がためなりりけりと知られて、いよくたのもしくおぼゆるなり。もうこの御一言である。先日小出さんが、お見舞に行かれた時、病床より起き出し言われたというのも、このひと所である。「仏かねてしろしめしてというこのお言葉がなければ」と言われて、あとの言は続かず、ほろ／＼と泣いて喜ばれたと云うのであります。

かく仏かねてしろしめして、初めより煩惱具足の凡人と



云つて下さるお慈悲ゆえ、あなたも心配する事はないではないか。人にものを頼むに相手が「よしよし分つた」というているのに「イヤもう少し自分の言うことを聞いてくれ」と念をおさねばならぬは、相手がまだ自分の心をほんとは知らぬと思うからなのである。

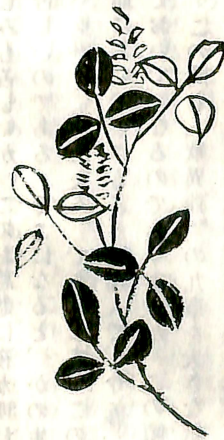
ところが、今仏は、善いも悪いも汝の心はみな知っている。知つたればこそ、その汝を救うために現われた汝を救うための仏であると、仰しやうて下さるのである。

しかるに皆んなが、これだけなら思う壺に持つて来い故、これだけで止めれば、よいのであるけれども、きつと何かこのあとに引つけものをして、妙な処に船を着けようとするからいかぬのである。たとえ、念仏を称えて病気がよくなり長生きがしたい。念仏を称えて心が「らく」になりたい、などと、自分の心を気持よくするための念仏ならば、義なきを義とすることでなく、大いに義のある念仏である。それ故、義なきを義とすることは、このお慈悲に夜が明け、これらがすつかり取れなくては、その味わいが分らぬのであります。

ところがまたあなたの言わるる事も、一面無理でない。今日一般には他力の偉大なるお力を説かず、唯他力にまかせよ〜と説いているのである。その本体の如何なるお力なるかを聞かずして、これにまかせられぬと言わるるの

に、さらに無理はない。それ程までにしろしめす広大のお慈悲なることを言わずして、唯無暗に手を放せ〜という事ばかりを言うのである。それでは手を放すと墮ちるからこわい故、放されぬ、しかし手足を放しても、しつかり背後から抱えていて下さる広大のお力ましますところに夜が明けた時には、何しに今まで頼りにならぬものを後生大事とつかまえて居たかとなるのである。

しかし凡夫の身は一旦お慈悲、夜が明けさせて貰えたからとて、はからいが止むわけでは無けれども、信の上は結局この遣る瀬なき思しめし一つに打ちまかせて、そこが通らせて貰えるのである。実際になると苦しき中より、無理々々大悲に引っぱられて其処を通らせていただくぐらいの有様であります。しかしここをお慈悲に夜が明けずに無茶苦茶にやるのでは、我慢であり、自暴である。云々



## 久遠のまこと

偉大なるものを憧憬する時代は、真実のものを忘れ易い時代である。真実なるものは、偉大なりという姿を持たない。真実なるものは、隠れたるものである。隠れて、偉大なりという意識をさえた持たないものである。

世間に名を知らるる生活は、人間として下の下なる生活である。併し名を知られざるを誇る生活も、亦囚われたるものである。随順の生活者は、名の知らるると知られざるを問題としない。至るところに、随順の心を失わない。而して随順するが故に、心は常に静かである。

忤う者は忤うことそのことさえ、服従という名義をつけることがある。我れは絶対の服従をなすが故に、我と違するものを懲罰するという。併し懲罰は、何人が真実にこれを行い得べきものであるか。懲罰すると称しながら、忤う心を満足せしめて居る者が、世には多いではなからうか。親に従うことは絶対の従順である。絶対の従順は、親の心が子においてはぐくみ出すものである。故に、子は忤い

ながら実は従つて居る。真実の親の前には、忤う子はない。忤うが如くに見えて、実は従順なるものである。子は忤いながらも、親を絶対信頼して居る。そこにありがたい親子の道がある。

久遠の親は、我等各自のいのちの裡に生きて通う久遠のまことである。我等はただこの久遠のまことに生かされて居る。久遠のまことは人生の潤いである。すきみ行く心をあため、沈み行く心をひき立てる深き生命の力である。

唯一筋に事業にいのちを投げ込む人、唯純一の情を此の人生にささぐる人、唯我意の動くままに世をわたる人、人生のすがたはまことに様々である。併しそれらのすがたのすべてを包容して、融々たる久遠のまことが無かつたならば、それらの様々の生活そのものも成り立たない。忤うものも、久遠の親の心にささえられつつ忤うのである。忤うことさえも、親のいのちの力の賜物である。

自覚とは何であるか、忤うものは、自覚とは自己の価値

福 島 政 雄



の意識であるとおもう。或は自己は無価値であると感ずる謙虚の自覚を云々する。併し、価値と無価値とに彷徨する者は、要するに囚われの人である。しかも我等は、常に囚われるものである。価値や無価値に囚われて真個に自己を放下する所以を知らない。従つて真に落ちつく事が無い。随順の生活は、真に落ちつく生活である。親の心に落ちつく生活である。久遠の親のいのちに落ちつく生活である。久遠の親のはからいの中に投げ入れてしまふ。そこには動ける心のままに、落ちつき行く心境が出現する。久遠の親といふのは空虚な概念ではない。久遠の親は、我等がいのちにおいて直に感ずる生きたるいのちである。我等の生みの親は、我等を久遠の親へと呼びさます此の世の縁である。生みの親を相對の存在として観じ居るとき、我等には、久遠の親が切実なはぐくみのいのちであることはわからぬ。生みの親と死別したる後において、はじめて生みの親が久遠の親のいのちの縁なることに目がさめる。そのとき、久遠の親のいのちが直に我等のいのちに生きてあることを、今更のように気づくのである。

歴史とはおき思出であるとも考えられるが、実は近き現実のいのちである。我等の過ぎし人生の行路は、三十年三十年の過去となれば、誠に人生一夢の感じを感ぜしめる

## 信行いろは歌

九十六才を数えられる広島藤秀理先生が、誰にも頂けるようにと「信行いろは歌」を作られました。その数首を味わせていただきます。

○はなに蝶々 ほとけと衆生 はなれられないわけがある

これは何とも有難い句です。大いなる天地の真実と私とにかくのごとき関係があったのです。「如来の法身は煩惱蔵を離れざるを如来蔵と名づく」と勝鬘經に語られています。が、この如来蔵がなかく深遠な哲理として論議されるのです。けれども論に深入りする必要はありません。要は仏と衆生の離れられない真実相を如来蔵と申されたのであり、それはとりもなおさず、私に先き立って如来の真実がこの身この心に入り満ちたまうて、私の目覚めを待ちわびておられる事に外なりません。法蔵菩薩の五劫の思惟、如

ものではあるが、併しながら振りかえる過去の夢は、実は現実生きて我等をはぐくむまことの背景である。過去をおもって現在を淋しがる心は、不徹底の心である。現前の一日々々に久遠のまことは我れを生かして行くのである。人生四十といえは、直に惑と不惑ともおもしろい、人生五十といえは、我れも亦天命を知るかと思う。さりながら、惑と不惑とを一貫して、天命を知ると知らざるとを論ぜず、久遠のまことは、常に我等が生命にかよい、惑不惑、知命の空華に迷わさるる我等の生命を、底の底から潤わさずんばやまじと、常住に動く。我等はそこに生かされて行く。借問す、何人がこの世に久遠の誠に触れずして生き得る人があるか。忤うもの、ひがむ者、世のねじけ人、白眼にして世をさげすむ人、これらの人も悉く、久遠のまことの胸に包容せられて行く。牢獄に投ぜられて、明日は刑場の露と消ゆべき人も、なおこの久遠のまことの胸に生かされて行く。生死を一貫して、我等をはぐくむいのちこそは、我等永劫の帰依処である。

我等は人生の経験を積み年齢を重ねるにつれて、我等が宿業の世界が同時に宿縁の世界であり、久遠のまことに貫き徹さるる世界である事に徹する処、順逆明暗、只一筋の徹底の光の下にある。人生の獄囚は転じて久遠の親の一人子たるを知る。極愛一子地の自覚というのもそれである。

## 井 上 善右衛門

来の誓願と本願の成就、念仏申さんと思ひ立つ心の起るごと、すべてが「離れられないわけがある」の一語に尽きましよう。有難いことであります。

○へたな思案をさらりとすてて ほとけたのめば ほとけさま

人間は下手な思案やはからいを、せずにおれない性質をもっています。如何に思案をしてみても、有限性を離れられない人間の思考というものは、究極絶対のほとけの真実に達することは出来ません。踏台をいくら積み重ねても、天には届かないのと同じ事です。ところが仏の真実は総てを貫き、一切に遍きが故に真実なのであります。「真実なるものは全体なり」というのは洋の東西を問わぬ真理であります。仏の方より衆生への道は開かれています。それが南無阿弥陀仏であります。仏をたのむとはこの南無阿弥陀



仏を頂戴することです。すると不思議にも如来の真実の徳がそのまま、この身の徳となって下さいます。白井先生が「慶哉、身は娑婆にありつつもすでに浄土の光耀を蒙る」と詠じられたおよろこびがここにあります。祖聖は「信心よろこぶそのひとを、如来とひとしときたまふ」と讃えられています。へたな思案はやめて畢竟依に帰命しましょう。

○ぬきさしならぬ われらのねがい お見抜きあつての御本願

人間は欲望の奴隷になっているのですがふと気がつくとき淋しいのです。夢幻のはかなさを感じずにはおられません。蕩々と流れる生死の不安が、底深く横たわっています。人間の智で死出のやま路は越えられませんが、愛憎の奥には牢固とした執我が根を張っています。この身に纏わりついている煩惱を、人間の意志の力では何とも出来ないのです。ぬきさしならぬ窮地に立たざるをえないのは、総ての人間に共通する現実です。それを何とか見ぬ振りをして覆い隠しているのが我々ですが、そこに人間の偽わることの出来ないわびしさがあります。心ある西洋の思想家も「何故人間は真の淨福のために、彼の本性の要求を探究しないのか」

れるのであります。

○おやに抱れたこの身の果報 なむあみだぶつが出るわいな

撰取不捨とは容易な言葉ではありません。人間には仮の撰取はあつても未徹る不捨はないのです。背に腹はかえられぬという俚諺がそれを示しています。その私が撰取不捨の大慈悲に遇い、本願力に撰取取られるということは何たる果報でありましょう。人間に生れたよろこびは、この時はじめて知らされましょう。才市老人詠うて曰く「世界にも、わしほど果報なものはない あみだ親さま わしが親さま、なむあみだぶつ 親もらくらく 子もらくらくで 親子たのしみ なむあみだぶつ」

○あすは明日の日、きのうはきのう 今日を大事に暮しやんせ

壮年期に思つた事ですが、年を取れば悠々自適の生活を樂しもうと期待したものです。ところが老年期を迎えた今日、身に沁むことは「老いぬれば心のどかにありえんと思いたりけりあやまりなりき」という窪田空穂氏の一首です。人

と叫んでいます。ぬきさしならぬ人間の願いを見抜きたまうて、その真の志願を満足せしめて下さるのが如来の本願であります。聖人は和讃に「無碍光如来の名号とかの光明智相とは、無明長夜の闇を破し、衆生の志願をみてたまう」と讃嘆されています。

○おとこおんなも 老若貴賤 おへだてないのが弥陀の慈悲

歎異抄には「弥陀の本願には老少善悪の人をえらはれず」とあります。人間は差別によって何事をも位置づけようとするのですが、ここに果しない取捨簡拙の世界が出現します。しかもそれが同時に自と他を二分する意識に結びつき、我は他非の争いとなります。また一度び自己の中に純粹の善を求めるとき「雑毒の善」の歎きを喫せぬものがあります。しょうか。「夢中の有無は有無ともに無なり、迷中の是非は是非ともに非なり」という言葉があります。人間は善悪差別の中で自縄自縛に陥るのです。如来の絶対真実は相對の迷いを等しく悲愍したまうのです。自他一如の真実界にどうして老若貴賤是非善悪のへだてがありませんか。平等一味の透徹した慈悲によってのみ人間の葛藤心はすくわ

生は思つたようなどかなところではなかつたのです。あれを思い、これを思うと煩いの種は尽きません。人生の身辺はいづれの人々にもそうしたものでありましょう。しかしよく顧ると、きのうをくやみ、あすを思い煩うのも虚しい幻想に悩むものではありませんか。それは却つて今日只今を軽んじ忘れてる姿といえましょう。現在只今ほど大切な現実はありません。まことの人生は今日一日の充実の連続の外にはないのです。念仏生活というのは、過去と未來の夢を離れて現在に顕現して下さる絶対真実に生き抜かせていただくことです。むなしい煩いを越える道は、これより外にないことに気づかせていただくのも仏恩の賜物であります。

梁塵秘抄（信解品） 後白河法皇編著

長者は我が子の愛しさに 瓔珞衣を脱ぎすてて、あやしき姿になりてこそ 漸く近づきたまいしか

窮児の譬ぞあわれなる 親を離れて五十年万の国に誘われて、草の庵にとどまれば



# 凡骨日誌抄 (7)

— お大師さん —

命（いのち）あって、今夏も亦高野山に上り、天徳院の離座敷に落着くことができる。本年で二十八、九年目、小堀遠洲作という庭も池も樹々も、寂かに私を迎えてくれる。樹間に仰ぐ空は蒼く靈涼の氣、部屋に充つ。

○ われながら驚く、いつのまにか七十二の誕生日を迎える。覚つかない足どりを省みるとおそろしくもあるが、ありがたくもある、日々念々、仏光に照らされて、自分という人間がいかに下劣であり駄目であるかを教えられ知らされている。そのためもあつてか、近ごろは、聖典や仏書を読むのが、いちばん落着き心も安まる。新聞よりも、雑誌よりも。

○ あわれ果かなし。たちまちにして二週間は過ぎて、高野をくだる日が近づく。よつてある日、出席をとるかわりに、百名余の高野山大学の夏季集中講義受講の学生たちに用紙

を配つて、質問や感想を書いて貰う。その中の一つ。「あなたはいつも笑顔でいる。馬鹿にされたようでシヤクである」と。これにはハツとする。実はわたし自身、自分のにこに顔を気にしている。親鸞聖人もわたしの尊敬している先生がたも、決してにこに顔でおありにならないのだから。

○ その感想文の二。「高野山大学の学生に講義なさりながら、どこか言外に、真言密教に対して批判的、見下しているものが感じられる。それにこれも誤解であるかも知れんけれど、優越意識がおりなさる。しかも表面的には低姿勢であるだけに腹が立つ」と。これも密教学専攻の学生で、なかなか手きびしい。お大師さんのお叱りとばかりに、合掌して繰返し読む。

○ 最後の日、多くの学生に見送られてテーブルをくだる。山峡の合歡（ねむ）の花の淡い色がいたく身に沁みる

○ ○ なのこの七月、上旬には新潟県寺泊の聖徳寺さんでの仏光寺派の世話方（門徒総代）研修会に、下旬には佐賀県武雄市文化会館での西本願寺全国保育大会（参加者千三百五十名）に、それぞれ三日間、空路を利用して参加し、有縁の多くの方々にあい、教えられるところが多かつた。お世話になりました多くの方々、まことにありがとうございます。

例によって、榎本栄一さんの詩をひとつ

## 一味の流れ

私にながれる命が  
地を這うて虫にもながれ  
風にそよぐ  
草にもながれ

## ヒルテイのこぼ

人生はそれぞれの時期に、それぞれの目的なり課題なりをもっている。たとえば、春ともなれば、樹木は何をおいても生長し開花すべきであつた、春のうちにすでに実

西元 宗助

を結ぶというようなことがあつてはならない。自然にくすくすと伸びようとするのに、わざとこれを押え、ただいたずらに速成栽培で多収穫をねらつたような、現代風のいじけた木になつた実は、自然に伸びきつた木でうれた果実のもつ品質に遠く及ばないし、おそらく滋養の点でも劣るのである。

## 道歌 盤珪 国師

世にありて世と遠ければ世のなかの人に  
見られて独り住むかな  
あらしふ  
湖上の月

仁保の海や 空も一つに映り来て 浪より出づる月を見  
るかな  
達磨の絵を需むる人に

我にある活ける祖師をばすておきて 外にもとむる紙の  
達磨を

春は花 秋は紅葉の色々も みなそのままの法のことの  
葉 池水に打むかひて

さしむかふ心は清き水かがみ よしあしうつるかげはと  
どめじ



# 九条武子夫人について

三美人のひとり

俗説によると、明治・大正時代を通しての三美人といわれる女性がいたそうなの、何でもその一人は柳原白蓮、今一人は、九条武子夫人、そしてもう一人はたしか松井須磨子だったはず。

だがいずれも薄幸の佳人というか、悲運のヒロインともいふべき方々であったようだ。もともと後世まで美人として名を止めたのには、やはり、悲劇の主人公ということが一つの条件であるのかも知れない。

ここに私がとりあげようとする九条武子夫人もまた悲しむべき人生航路を歩んだお一人。夫人は一八八七（明治二十年）西本願寺の明如上人、大谷光尊師の次女として誕生したが、幼少の頃どんなに恵まれた環境にあつたか、その詠歌を通してしのぶことができる。

三夜莊 父がいましし春の日は  
花もわが身も 幸多かりし  
しかし、その順境は長くは続かず、男爵九条良致氏に嫁

## 川 畑 愛 義

いだがその悲運の第一頁、新婚旅行をかねたロンドンからひとり内地へ帰ることになった。

それからほとんど堪えがたいほどの別離の愛憎と情怨の生活が始まる。それから帰朝後まとめた歌集「蕪染」（くんぜん）のなかにひかえめに収められている。しかもこの歌集は、当時、東京読売新聞社の「読売文学賞」の第一等に当選するほど大衆の心を動かしたようだった。

その歌の中には、今日の若者たちにもなお訴えるものがあるにちがいない。

かりそめの、別れと聞きておとなしう  
見渡せば西も東も霞むなり

君はかへらず また春や来し  
夜くれば ものことはりみな忘れ

ひたぶる君を恋ふと告げまし  
何の理由も告げず遠く異国から一人帰らされ、その後何

の便りも寄せない夫君、その切なさをこらえての恨み、つらみがどんなものであつたか。とくに、純情・潔癖・無垢のまま育つた深窓の貴人にとって、何にもたとえられないほどの苦悩にさいなまされたにちがいない。今や彼女の目の前には、絶望という名のあやしく冷たい虚像がたちほだかるばかりであつたのである。

### 別離と絶望

そしてこの底知れない絶望のはてに、彼女がようやく発見したものは、ほかならぬ絶対他力の信仰であつた。

大いなるものの力にひかれゆく 覚束なしや  
わがあしあとの 覚束なしや

現世の幸福につつまれている間は、めつたに宗教を求め、神仏に頼ろうとする心境には到達しないのが人情である。いうなれば順風満帆の航海に救命用具など要らない。むしろ邪魔にさえなるであろう。それに對し、もし暗夜の荒海に遭難し、とうてい救助される見込みもたないとき、人々は何を求め、何を呼ぶであろうか。救助船か、救命具か、それとも神仏の救済であろうか。

しかし現実の社会、わが生活、己が生命を深刻に正視するとき、それらの頼みはすべて無常……我、人ともに今夜

### 慈光さんさん

九条武子夫人も身も世もあらず泣きぬらしたその涙のなから、ついに幼少時代から薫染していた仏法にめぐみ、大慈大悲の慈光を仰ぐようになるのである。

抱かれてありとも知らず おろかにも  
吾反抗す大いなる御手に

そして一度このようにして真実の信仰の光明に撰取されるとき、最早やいかなる運命の試練をもうちこえて進むことが出来るであろう。彼女はその後、この絶対他力の信仰の喜びと幸せを、その間にも去来する不安や憂悶のなかから、美しく歌いあげて、「無憂華」を書いた。これも多くの人々に愛読され、悲運をかこつ民衆にやさしい力と光を与えた。

絶対他力の信仰にめざめた彼女にとって、そこから真実の女性として、いや一人の人間としての生活の歩みが始まる。  
すなわち仏教婦人連合会長、東京真宗婦人会長、また感



化団六華園長として、遠く海外まで活動の歩みを励ましていくのである。そして写真にみられるような類いまれな端麗な美しいお姿をその頃の貧民窟、あるいはスラム街にまで運び、今日でいう社会福祉、慈善事業の先頭に立って、ひろく民衆からあたかも生ける観音菩薩の如く渴仰されたのである。

今や、彼女の前には過去のいまましい暗い追憶はない、あつてもそれはやがて運命の悪戯とうけながし、その逆縁悲運に感謝することさえできるのである。彼女の述懐の一端を記してみよう。

「絶望に徹したとき、まことの道は展げ、まことの力はそこに燃え出てこよう。おしえの中にすむおしえのままに生きるものこそ如何なる運命の戯(たわむれ)にもこれに打ち克つものである。」

私ごとながら、ときどき西大谷の御廟の東側の夫人の墓所に参詣することがある。そうしたおり、たいてい新しいお花・線香が供えられている。夫人はなお死んでいない。

かえりみて、来る日も来る日もあくせくとあわただしく憂き世のはかない富と幸を求めて、私どもは自転車操業をしている。そしてその間、「真実の自己の最奥に眠っている生命の本態をめつたに認識することができない。その自己を呼び起こしてくれるのは、あるいは現実的絶望だけかも

しれない。ドイツのノーベル賞作家、ヘルマン・ヘッセはつぎのようについている。

「神が人に絶望を与えるのは、その人を殺すのではなく、新しい生命をわれわれにめざめさせるためである」

“Die Verzweiflung Schickt uns Gott nicht,  
um uns zu toten, er Schickt Sie uns,  
um neues Leben zu erwecken.”

..... Hermann Hesse

なお、難聴・失恋、極貧などの三重苦にあえいだベートヴエンも自殺決行の直前、神の声を聞き、最高の傑作といわれる第九交響楽などを作曲した。彼は絶望の教訓を次のごとく讀んでいる。

「人は絶望のくらやみのなかで初めて神の手にじかに触れることが出来る」

#### 常楽への招待

もしここにただ絶望を通してのみ真実への目ざめ、神仏からの救済があるとすれば、人々はどうしてその絶望を招来することができるであろうか。絶望の探求、それは実際上案外困難なことかもしれない。なぜならば人間は本

人々が己の悪性と煩惱に気づき、無力無常を自覚すると  
き、そこから絶望が始まるとともに悠久な常楽の世界への  
招待状が寄せられるにちがいない。

#### 寂静の世界

「世界は、太陽は、そして宇宙は心楽しき者のためにある。」  
Dem Frohlichen gehort die Welt die Sonne und das Himmelszeit

Hermann Karsten

これはわが親友ヘルマン・カルステンが残してくれた詩の一句である。彼はドイツのレーマーゲンというライン河畔の美しい小都市に自然療養所 Naturheil-Sanatoriumを創建し、病めるもの、悩めるもの、傷めるもののためにその生涯をささげた。特殊の場合を除き、ほとんど薬剤や注射などを用いず、神の愛と人人の自然療能を信じ、心身の医療活動をつづけて偉大な効験をあげてきた。そして八十三才、昨年の暮に眠るがごとく神に召されて昇天した。今私の手もとにあるこの一句は、彼が自筆し、彼の書齋にかかっていたもの、それを博士の遺志によって夫人から私の手もとに届けられたのである。

能的にひたすら安寧と幸福を追求し、極力障害や苦難を避けようとするからである。どんな小さな逆境からも、私たちは脱却することに焦慮するが、その原因や正体をめつたに直視しようとはしない。しかし覚めた目でみれば、先賢が告げた如く、人生はもともと苦海にも火宅にたとえられる。決して楽園でもなければまた天国でもないはずである。親鸞聖人がこの世に対し「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごとたわごと真実あることなきに、ただ念仏のみぞまことにおはします」と万有否定論を持たれたのは、まさに千古の真言といわねばなるまい。それではなぜこの活社会に真実がないのか、それはいうまでもなく人間の本性のなかにあまりにも多くの矛盾と闇愚をもっているからであるにちがいない。ここに、日本仏教の開基とも仰がれる伝教大師最澄は何と懺悔したか、「愚の中の極愚、狂が中の極狂、塵禿の有情、低下の最澄」と、その悲しい性(さが)を正視していられる。つぎに、再びふり返ってみるとき、伝教大師さへ悲歎するこの悪性を照らし出している英知こそ崇高な次元のものと考えるべきではないであろうか。絶望と暗冥の投影が見えるのも実はそこに当てられている光明の証明でなければならぬ。光線のないところに陰影はささないからである。しかも強い光ほど濃い影をつくる。



博士はどんな場合でも清らかな、明るい微笑を忘れず、幸いやすく悩み多い患者たちを大きな奉仕の愛情でつつんでいた。自然を愛し、音楽を愛し、何よりも神を敬い、人を信頼した。今や彼自身大いなる恩寵の光の世界へ帰っていった。悠久のいこいのなから、その日その日の暮しにあわただしく駆けめぐっている私をみてあわれに思い、呼びかけているのかも知れない。

日本「三界は唯一心だよ、世界は心樂しき者のためにある」



博士はどんな場合でも清らかな、明るい微笑を忘れず、幸いやすく悩み多い患者たちを大きな奉仕の愛情でつつんでいた。自然を愛し、音楽を愛し、何よりも神を敬い、人を信頼した。今や彼自身大いなる恩寵の光の世界へ帰っていった。悠久のいこいのなから、その日その日の暮しにあわただしく駆けめぐっている私をみてあわれに思い、呼びかけているのかも知れない。

友情が、人生の真の宝を共同で真剣に追求することを支柱として成り立つ場合は、それによって友情にしっかりとした基礎がたたえられることになる。

○ 真実の友情は身分の違いは邪魔にならず、国籍、職業、財産、地位の差も障りとならない。

○ 人に何等求めることがなければ、その人を見る眼が全く違ってくる。そうした眼において始めて正しい判断が出来る。

人間は元来あまり信頼できないものだということを、生まれてはじめていやでも信じなければならなくなった時こそ、人生の重大な瞬間であり、ときにはこの人生のそれからの方向を決定する瞬間でもあります。

忠告は雪に似て、静かに降れば降るほど、心に長くかかり、心に食いこんでいくことも深くなる。

## 念仏詩抄

香師はおおせに  
ヨホドの信者でない  
地獄に墮ちきれんゲナ  
林間の静寂  
わたしはスグに  
このままのお助けと  
墮ちん身にする  
墮ちきらんではミダに  
遇(あ)えんというに

香師 香樹院徳龍師

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

## 木村無相

それでお浄土は

香師はおおせに  
今の世は  
説いてく説きつくし  
開いてく聞きつくす  
ものがない

それでお浄土は  
往き易くして  
人無しと

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ



ナムアマミダブツ

ナムマシヤマシヤ

香師おおせに

助かりたいで

助かるでない

お助けの御念力

お助けられる

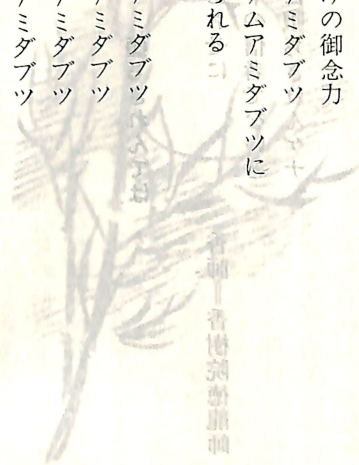
ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

香師おおせに

死なぬくと 精進



われぬのカラダとイノチは

時々尅々(じじこくこく)を

待たずに

死なぬくと

死にゆく身

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

念仏の申されぬは

香師おおせに

念仏の申されぬは

後生が大事でないか

信の無きシルシ

無き 申

三寶 眞実信心は 出で出るは 出で出るは 出で出るは

願力の信心は 願力の信心は 願力の信心は 願力の信心は

ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ

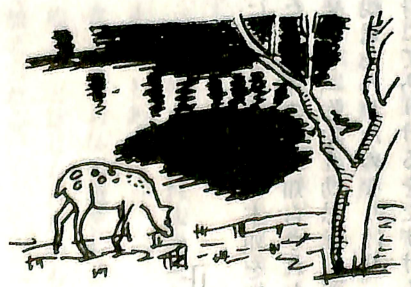
ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ



生まれるのじやと 死なぬのじやと 生まれるのじやと 死なぬのじやと



# 最近心に去来すること

著者一、本願を聞いて自己が照し出される

近角先生がいつも引用された一つに姨捨山の話がある。若い農夫が老いた母を山奥に棄てて山路をたどりゆくにつれて、背に負われた老母は頻りに小枝を折って柴をした。これは母がまた帰るための路標に思っているのだろうか。若者は思った。山奥に着いて別れを告げると、此処は深い山奥だから、お前が迷うて困るだろうと思つて、柴をしておいた。無事に帰りなさいやと。これを聞いて若者は自分の考への浅薄さと、あさましさに驚いて、涙乍らにわびて母を負うて山を降った、という話である。

親の真意を子に告げられた時、はじめて子の不孝な姿が知らされたように、仏願のおまことを聞かされる時、自己の煩惱の全体と、これからさきもそれより外にあり得ない三世にわたる自己が照し出されるのである。他山の石であるが、パスカル（科学者であり篤信者）は、キリストによつて神を知り、そこで自己が知らされた、と述べているが、

更に、第十三の寿命無量のお誓は、煩惱に覆われて、いつまでも無常に驚かず、他人の悪は見えても自分のそれに気づかず、迷ひ苦しむ我々、いつまで経つても一人立ち出来ぬのを見そなわされて、何時々々までも手をとつて下さるうためである。

すべて親は子になくはならぬことのために苦勞される、如来もまた煩惱具足の凡夫の我々になくてはならぬことを見抜かれての本願建立である。読者の方も、一一の願を何故に発起下されたかに思いをこらして下さる時、そこに如來の御目にうつる我々の實際の姿に気づかれるであらう。

さて、大無量寿経の下巻に貪・瞋・痴の三毒の煩惱に狂うている姿と、或は殺し合ひ、騙し合ひ、男女の乱れ、威張り散らし、湯水のように財産を消費するなど、五つの悪を犯す姿を述べられているのも、仏心に映る我々の実状である。福島政雄先生は二十六の時、近角先生に師事され、二十七の頃、この第五の悪を読まれて、これは自分のことである。こうした自分だから御本願を建立して下されたのかと、渴仰されている。又、近衛正子女史は、今度の戦争で御主人を亡くされ、種々苦しまれた拳句、寺に育つたおかげで自分の業ということに気づき、下巻の三毒段のところ、これは私のことであると気づかれ、御本願を喜ばれ

花田正夫



私は、親鸞聖人によつて弥陀仏の本願を知らされ、そこに自己の三世にわたる全体の姿が知らされたのである。

聖人の常の仰せにも「弥陀五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」とある。

今試みに四十八願の第一に、地獄・餓鬼・畜生無き国をつくらんとのお誓いも、我々が毎日毎夜三毒の煩惱に狂うて、三悪道の種を蒔きちらして後始来も出来ないでいる者を悲憫されるためである。

又、第七に他心智通を誓われたのも、利己の一念に支配されて、ひとの心を知り得ない身をお見抜き下さつての大悲の願である。

又、第十二の光明無量のお誓を建てられたのも、煩惱に碍げられて、何処でも失敗ばかりする我々を何所までも見護つて下さるうためである。

るようになったとのことである。

さて、源信僧都は、往生要集の中に「下品の三生、あに我等が分に非ずや」と述べられているし、法然上人は観無量寿経釈のところに「下品、最も要なり、頗る我等が分に相当せり」とある。両師共に、煩惱具足の凡夫が、五濁惡世に処して造る惡業にまつられる下機の惡凡夫の救われるところに御自身を見出しておられ、僧都は「余が如き頑魯の者」と云われ、上人は「十惡・愚痴の法然房」と慚愧していられるのも思いあわされる。

以上、本願の光に照らされて自己が見出され、そこに我身一人のための慈光をよろこばせていただくたよき人々の実例をあげて、我々の業とさせていたいただきたいのである。

## 二、本願におあい申す場所

維摩経に「高原の陸地に蓮華を生せず、淤泥の湿地に蓮華を生ず」とある。我々は目を外に向けて、如来いずこにと探し求めるが、そこには見当らず、内なる煩惱の泥沼の中に入り満ちて下さるのである。

観無量寿経に「諸仏如來はこれ法界身なり、一切衆生の心想中に入りたまう」とある。

源信僧都が「夜もすがら仏の道をもとむれば我がこころにぞたづねいりぬる」と詠じられたのも、目を内にむけることの大切さを教ええられる。



他山の石であるが、アウグスチンは「外に出るな、内にかえれ、内なる人にこそ真理は宿る」と云っているし、中国の有名な詩にも、春を尋ねて野山を走り廻ったが春が見つからなかった。疲れて我家に帰り庭に咲く一輪の梅花を見てそこに春色が満ち満ちていたと云うのもある。

然し、我々は一番大切な自己を知ることが出来ず、あそこか、ここかと迷い続ける。道は近くにある、人これを遠くに求めると云う俚諺も思い知らされる。

我々は「汝自身を知れ」というソクラテスの言葉は聞いているが「鏡は鏡自身をうつせぬように、如何なる智慧者と雖も身辺三尺は暗闇である」とはきびしい教である。

ゲエテも、自分を知ることの大切さは誰もよく知っているが、実行する人は無い、これからもそうであろう、とそのむつかしさを歎いている。

孔夫子は、十指の指差すところを聞け、と教える。成程身びいきな自分が見た自分よりも、十人の人々の眼にうつる自分の方が確かであろう。しかし我執・我慢の強い我々は他人の言葉をすなおに受け容れられない。ことに欠点でも指差されると、自分ばかりではないと逃げる。

次に、子を知るは親にしかずと云う。成程親は他人と違って、子の身になって理解しようとする。そこに親の言葉

は子の耳に入り易いけれど、煩惱に曇らされて、盲目の愛に墮ちる恨みがある。

最後に、悲智円満の仏心に映る我等の姿こそ、實際をそのままに知らされる。前頂に本願を聞いて、その知らされることを述べたとおりである。要は、本願の思召しをよく聞かせていただくことである。

私事で恐縮ですが、私の右の拇指が曲ったままであるが、この片輪の指を父は何日もマッサージしてくれた。それかといつてもすこしもよくはならなかった。医師もこれ以上はと匙を投げたのに、父だけが直らぬ指を苦しめてくれた。その父と別れてもう五十余年になるが、この指を見毎に父の姿が浮かぶ。私は父に遭うよい名所を右指の拇指に持っている。それをとうして同時に、どうにも始末のつかぬ煩惱の中に、我行精進忍終不悔の仏慈を頂く。

### 三、本願を聞いて志願が満たされる

或日、不治の病を持たれた婦人が来られて「私は病氣ばかりしていて子供もないし、嫁入りさきにも居ずらいので、実家に帰っているが、父も母も老齢で、こんな病気で帰ると朝から溜息ばかりで、もう早く死んだほうがよいと思う」とのことであった。

そこで私は、いのち長うして恥多しということもあるが

反対に、生きていてよかったということもあるから、よいわるいは私には云えない。然し、人間に生れているのだから、人間に生れた喜びだけは味いたいものです、と云うと、「こんな境遇に立つても人間としての喜びがあるでしょう」と尋ねられたので、現在の境遇には満腔の御同情はしますが、当市で処刑された死刑囚の二人は、皆んなに御礼を云い乍ら浄土に旅立って行った。又難病とされるハンセン氏病で失明された人が、仏心に眼が開かれて、報恩の道を辿っている人もある。そこに不幸のどん底にあつて幸に

仏法を聞いてそこに光を見出したのです。これは源信僧都の法語ですが「それ人間に生れたこと大きな喜びなり。…本願にあうことをよろこぶべし」とあります。この喜びは着た衣装でなしに、素裸のなりのよろこびです。だから境遇の如何によつて妨げられないのです。と告げ、時に奥さんは仏法を聞くか読むかしたことがありますか、とおたづねすると、一度もありません、との答えであつた。

しかし、日本は仏法の潤う国とて、知らぬ間に身辺にただようしています。その一つ、いろは歌は御存じでしょう、今奥さんはその前半を体験していられます。楽しい希望をもつて結婚されたが、いろはにはほえどちりぬるを、でわれひと共に、わがよたれぞつねならむ、です。然し、そのあとに、ういのおくやまけふこえてあさきゆめみじえひ

もせず、があります。そこに光明の世界がひらけるのです。

が、むつかしい理論はあとに廻しまして、単刀直入に、私にだまされたと思つてよろしいから、お念仏申して下さい。どうにもならぬまんま、口にお念仏申して下さい、とお願ひして別れた。その後十日も経つた時、あれから行き詰るにつけてお念仏申しておりますと、そこにあかるいものが知らされました。お念仏はありがたいですね、と一縷の道が開けはじめたことがあつた。

さて、仏法によつて味えるよろこびは、人間に生れたなりの喜びである。このことは世の中に見ることの出来ぬものである。そこにそれを障えるものはなくなる。一番苦しく悲しいのは自己の死の問題であるが、浅原才市翁のうたにあるように

才市 いくつになつた

六十五になつた

この世の目の暮れは

あの世の夜明けなり

ご恩うれしや 南無阿弥陀仏

と生き死にも妨げとならぬのである。



## あとがき

八月十五日のお盆の日、滋賀県能登川町の

発願寺、園憲章師の御逝去されたお電話をいただいた。師とは近角先生を介して四十余年前から親しくさせていただいた。年齢も同じ七十七。お念仏裡にありし日の面影が浮かび、お別れが惜しまれてならない。「残る桜も」やがて散り、俱会一処のみ仏のお誓いをたのみばかりであります。

近角先生の信仰談話は、大いなる如来の御はからい一つをご懇切に示し下さいました。

古歌の

不思議なる仏のまことはからいてはからいつきてはからわれ行く

を誦しながら筆写させていただきました。

福島先生の旧著「ひらけゆく心」から転載させていただきました。「子の母を思うがごとくに衆生仏を憶すれば現前当来 遠かなくず、如来を拜見うたがわず」の御和讃をも思ひ浮かべました。

井上様は、九十五翁の広島藤秀環先生のお法悦のお歌を御紹介して下さいました。病身とて家にほとんど籠居して居ります私には、ありがたいことであります。

西元様は今夏、寧日もたく、法縁を随所に結んで下さっていられるお忙しい中を、善財童子の求道物語のように、よき教を身にうけられての日誌抄をいただきました。

又、川畑愛義様は九条武子夫人を偲ばれながら、最近の法味を述べて下さいました。京大を停年で退ぞかれてからは「健康な子ども」誌を日本生活医学の研究所から月々発行され、大きなともしびを掲げて居られます。御住所は、京都市東山区今熊野日吉町四八―三九

木村さんは、退院が長引いておりますが、十分に治療を続けて下さるよう祈念しております。木村さんも私と同様、喜寿を迎えられました。私自身、最近何処でもいつも繰り返しておりますことを筆にしました。もの言わぬは腹ふくるるわざ、とか申しますが、さて書いて見て、口あいて唇さむしの感じなのであります。御判読下さいますように。

## △御案内▽

○毎月第一、第三日曜、午後一時半

一道会例会 一道会館の南隣り

南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目 角。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四  
毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り又は北山下車。

地下鉄、御器所通り下車

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。

(但し日曜を除く)尾西市三条板倉

名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定 価 半 年 八〇〇円(送共)  
一 年 一六〇〇円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八  
編集・発行人 花 田 正 夫

電話八二一局七〇三七番  
愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 坂 部 光 雄  
名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈 光 社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

郵便番号 四五七